



第113回 日本精神神経学会学術総会

精神医学研究・教育と精神医療を繋ぐ

＝ 双方向の対話 ＝

My Abstract

会期 2017年6月22日(木)～24日(土)

会場 名古屋国際会議場

会長

尾崎 紀夫

名古屋大学大学院医学系研究科
精神医学・親と子どもの心療学分野 教授

副会長

岩田 仲生

藤田保健衛生大学医学部
精神神経科学講座 教授

舟橋 利彦

一般社団法人
愛知県精神科病院協会 会長

CONTENTS

2017年6月23日(金)

8:30-9:30	一般演題(口演) 13 アルコール・薬物依存 1 F会場(名古屋国際会議場 1号館 3F会議室 131 + 132)	
	アルコール依存症の治療継続のために自助グループの果たす役割についての考察……………	1
	物質使用障害患者の治療継続性—1年予後と早期治療中断者の臨床的特徴……………	2
9:40-10:40	一般演題(口演) 15 アルコール・薬物依存 2 F会場(名古屋国際会議場 1号館 3F会議室 131 + 132)	
	小児期逆境体験による信頼感の障害が物質使用障害の重症度に及ぼす影響—信頼障害仮説の検証①……………	3
	小児期逆境体験の類型から見るアルコール依存症・薬物依存症別の不信感及び重症度—信頼障害仮説の検証②……………	4

一般演題（口演）13 アルコール・薬物依存 1

2017 年 6 月 23 日 (金) 8:30-9:30 F 会場（名古屋国際会議場 1 号館 3F 会議室 131 + 132）

司会) 藤田 潔 : 1

1:医療法人静心会桶狭間病院

2-O13-1

アルコール依存症の治療継続のために自助グループの果たす役割についての考察

【演者】黒澤 文貴:1

【著者】黒澤 文貴:1、小林 桜児:1

1:神奈川県立精神医療センター

【目的】アルコール依存症において、断酒継続とともに治療継続性の維持は重要である。治療継続により、再飲酒の際に速やかに適切な治療を導入することが可能である。再飲酒をしながらも一定期間通院を継続している患者の、自助グループ参加状況について調査し考察した。

【方法】H26 年 12 月から H27 年 11 月の間にアルコール依存症の診断で当院に定期的に継続して通院し、演者が担当している患者のうち、期間内に再飲酒してしまった患者について、診療録に基づく調査を行った。主な調査項目は、自助グループへの定期的な参加状況である。他にも同居家族の有無や就業の有無についても調査した。

【結果】調査対象となった患者は合計 54 人（男性 37 名、女性 17 名）であった。うち自助グループ（断酒会、AA 等）に通っている患者は 22 名（41 %）であった。

【考察】昨年度本学会において、本調査と同期間における一年間断酒継続者のうち、自助グループ参加者の割合が 22 %程度であったことを報告した。その結果と比較して、本調査の結果は統計学的に有意に高値 ($p < 0.05$) であった。アルコール依存症自助グループが、従来言われてきた断酒継続性を高めることのみならず、再飲酒をしつつも治療継続性を高めていくための役割を担っていると考えられた。

2-O13-4

物質使用障害患者の治療継続性—1 年予後と早期治療中断者の臨床的特徴

【演者】小林 桜児:1

【著者】小林 桜児:1、板橋 登子:1、黒澤 文貴:1、吉松 尚彦:1、寺山 慧:1、辻村 理司:1,3、山本 恭平:2

1:神奈川県立精神医療センター、2:公益財団法人復康会沼津中央病院、3:横浜市立大学附属市民総合医療センター

【目的】物質使用障害（以下 SUD）患者は治療から脱落しやすい一方で、海外の研究では治療継続性が高いほど、長期的な断酒断薬予後も良好であることが報告されている。したがって SUD 患者に効果的な治療を提供していく上で治療継続性を高める関わりが重要であり、そのための基礎資料として初診後の SUD 患者の治療経過と継続性に関わる予測因子の調査が不可欠である。今回、われわれは SUD 患者の初診後 1 年間の治療継続性について診療録に基づいて後方視的に調査したのでここに報告する。【方法】対象は 2015 年 5 月から 11 月までの 7 ヶ月間に神奈川県立精神医療センター依存症専門外来を初診となった SUD 患者 204 名（女性 57 名）である。乱用物質の内訳はアルコールが 104 名、薬物・多剤が 100 名であった。後方視的に 2016 年 11 月までの診療録の記録から初診 1 年以内の治療継続性と、初診時の各種調査項目との関連について調査した。【結果】初診から 1 年後の時点で治療継続中であった者は 71 名（34.8 %）で、1 年未満で治療を自己中断した者 80 名（39.2%）、転医 35 名（17.2%）、終結 13 名（6.4%）、逮捕 4 名（2.0%）、死亡 2 名（1.0%）であった。治療中に再乱用が確認された者と断酒断薬継続していた者との間に治療継続性の差は認めなかった。初診後 1 ヶ月未満で早期に自己中断した者は、初診時信頼感尺度の「不信」（天貝、1995）と被受容感・被拒絶感尺度の「拒絶感」（杉山・坂本、2006）の点数が有意に高く、ストレス対処能力を評価する SOC（Antonovsky,1987）の点数が有意に低かった。「不信」「拒絶感」「SOC」はいずれも 15 歳までの生育歴上の逆境項目総数と有意な相関を認めた。【考察】SUD 患者は 1 年以内に全体の約 4 割が自己中断していたが、経過中の物質再使用は治療継続性と無関係であった。特に 1 ヶ月未満で早期に治療から脱落した群は他者への不信感や被拒絶感が強く、ストレス対処能力が低いことから、性急に断酒断薬を要求するのではなく、生育歴上の逆境に注目し、共感と信頼関係を優先する治療関係性が SUD の治療においては重要であることが示唆された。

一般演題（口演）15 アルコール・薬物依存 2

2017 年 6 月 23 日 (金) 9:40-10:40 F 会場（名古屋国際会議場 1 号館 3F 会議室 131 + 132）

司会) 松本 俊彦:1

1:国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部

2-O15-4

小児期逆境体験による信頼感の障害が物質使用障害の重症度に及ぼす影響—信頼障害仮説の検証①

【演者】板橋 登子:1

【著者】板橋 登子:1、小林 桜児:1、黒澤 文貴:1、福生 泰久:1、寺山 慧:1、吉杵 尚彦:1

1:神奈川県立精神医療センター

【目的】アルコール（以下 AI）・薬物依存症の重症度と、小児期逆境体験・不信感・ストレス対処能力との間に相関が見られたことが、先行研究で報告されている（小林ら、2016）。本研究では、依存症において「小児期逆境体験が対人不信感および被拒絶感を強め、世の中の一貫性安定性を信じ他者を頼ってストレス対処する力が低下し、AI や薬物依存が重症化する」という仮説モデルを設定し検証を試みた。

【方法】H27.5～28.11 に当院依存症外来を初診となり、研究の同意を得られた者に自記式質問紙を実施した。主診断名が AI もしくは薬物依存症以外の 69 名と、記入不備のあった 76 名を除く 437 名を分析の対象とした。①小児期逆境体験 17 項目、②信頼感尺度（天貝、1995）のうち「不信」、③被拒絶感尺度（杉山・坂本、2006）、④ SOC 邦訳版 13 項目 7 件法（山崎、1999）、⑤ AUDIT/DAST-20 の変数を基に、AI 群 217 名、薬物群 220 名についてそれぞれ、本研究における仮説モデルの共分散構造分析による検証を行った。

【結果】AI 群、薬物群ともに、逆境累積度数が AUDIT・不信感・被拒絶感の増加、不信感が被拒絶感の増加、不信感と被拒絶感が SOC の減少に、それぞれ影響を与えていた。AI 群では被拒絶感が AUDIT の増加、薬物群では SOC が DAST の減少に、それぞれ影響を与えていた。各種適合度指標から、モデルの当てはまりは一定の水準を満たすと考えられた。

【考察】依存症において、小児期の逆境的体験は不信感や被拒絶感を強め、物質乱用を深刻化させることが示唆された。AI 群では「他者から拒絶されているのではないか」という孤立感や不安感を緩和する、薬物群では他者を頼れないために低下したストレス対処能力を補完する役割として物質に依存せざるを得ないという特徴がそれぞれ見受けられた。依存症治療においては、このような過程を理解して、生育歴に丁寧に耳を傾け、他者から受け入れられる感覚や信頼感を培いながら、物質ではなく人と関わることでストレスに対処する方法を学べるようなプログラムを提供することが必要と考えられる。

2-O15-5

小児期逆境体験の類型から見るアルコール依存症・薬物依存症別の不信感及び重症度—信頼障害仮説の検証②

【演者】板橋 登子:1

【著者】板橋 登子:1、小林 桜児:1、黒澤 文貴:1、福生 泰久:1、寺山 慧:1、吉村 尚彦:1

1:神奈川県立精神医療センター

【目的】物質使用障害と小児期逆境体験について、小林ら（2015）は信頼障害仮説の観点から、薬物依存症においては虐待など明白な体験による対人不信感との関連を、アルコール（以下 AI）依存症においては過剰適応につながる逆境との関連を、それぞれ示唆している。板橋ら（2016）は依存症者の逆境について、人間関係で「見捨てられる—束縛される」という軸と、自分で「どうにかできた」という罪悪感—どうにもできない無力感」という 2 軸で 5 群に分類される可能性を見出した。本研究では、第 1 報での報を基に、依存症者の小児期逆境体験を分類したモデル図の検証を行い、AI、薬物依存症を比較し考察することを目的とした。

【方法】H27.5～28.11 に当院依存症外来を初診となり、研究の同意を得られた者に自記式質問紙を実施した。対象者および質問紙構成は第 1 報と同様である。小児期逆境体験は、板橋ら（2016）の分類を基に 5 群（学校や社会からの孤立、過剰適応の強制、疾病既往、被虐待体験、ネグレクト）に分けて外生変数とした。AI 群 217 名、薬物群 220 名についてそれぞれ、本研究における仮説モデルの共分散構造分析による検証を行った。

【結果】AI 群、薬物群共に「被虐待体験」が不信の増加に影響を与えていた。AI 群では「過剰適応の強制」が不信の増加、「疾病既往」が AUDIT の増加に影響を与えていた。一方、薬物群では、「被虐待体験」が被拒絶感と DAST の増加、「学校や社会からの孤立」が DAST の増加にそれぞれ影響を与えていた。各種適合度指標から、モデルの当てはまりは一定の水準を満たすと考えられた。

【考察】被虐待体験が不信感に直接影響を及ぼすことは両群に共通していた。AI 群の深刻化の背景には、過剰適応や過緊張を強いられる体験、自身や家族の疾患などで制限を強いられて無力感に陥った体験が、一方薬物群では依存症の深刻化の背景に、人や社会から背を向けられ孤立した体験が窺われ、治療的介入の際には両者の違いに留意する必要性が示唆された。